

● 事例紹介 ●

鹿児島県の戦略的大学間連携事業

「グローバル化」の時代における地域高等教育

ね だち
根 建
むね とも
心 具

(鹿児島大学 教授・学長補佐)

一 はじめに

「大学間連携」という言葉が最初に登場したのは、昭和四六年の中央教育審議会答申である。この答申には「高等教育機関の間で連携組織を作り、履修単位の相互承認を行う」と提言され、翌年には単位互換が制度化された。以来、様々な形態の大学間連携が登場した。鹿児島大学も、九州地区国立大学合同合宿授業、大学院連合農学研究科、授業交流（単位互換協議会、教育研究施設の共同利用、大学コンソーシアム鹿児島、等々、様々な大学間連携に参加してきた。「連携」の大きなメリットは、個々の努力を結集すること

で、教育・研究の質を高め、結果的にその成果を効率的に上げることにある。連携には目標の共有と、協力・協調が不可欠であるが、従来、高等教育機関の教員は自己の教育・研究に精力を注ぎ、連携にあまりなじみがなかった。近年、研究の分野ではシステムの発想が不可欠となり連携に違和感が少なくなっているものの、教育の分野では、未だ困難を抱えている。それは、総合大学の教養教育の変遷によく現れているのではないかと考える。教養教育は、志す専門分野にかかわらず全ての学生に必要な最高学府の良識が結集する学内連携である。戦後、教養教育が低迷し、教養部改組後、さらにそれが顕在化した理由は、全学のコア教育としての理念や

目標を共有できなかったことにあるのではないだろうか。建学の精神やカリキュラム等に差異がある大学間の連携を推進するには、さらに大きな困難に直面する事は容易に想像される。これをメリットとするには、高等教育の理念や教育目標をより一層明確にし、大学間で確認・共有する必要があるように思われる。これがなければ、連携はたちまち形骸化するであろう。平成二〇年度に始まった戦略的大学連携支援事業においても、一〇年間の長期的展望が要求された。

二 グローバリゼーションの波の中で

日本の若者に「生きる力」が乏しくなってきたと言われて久しい。「素直でおとなしい」とも「夢がなく活力がない」とも指摘される。大学では、自己表現能力や課題解決能力の養成等、教育の改善に取り組んでいるものの、卒業しても人生が定まらないケースが間々見られ、企業での新人研修の負担や、早期転職、ニート・フリーター等、社会的負担が増大している。

若者の「生きる力」の低下は、「赤信号みんなで渡れば怖くない」という大衆迎合型の体質を持つ日本で特に顕著である。長年、学生と接触して感じるのは、この問題は、大人社会が考える以上に、若者の大きな潜在的葛藤になっ

ていることである。「自立してほしい」という教員の願いの中で、学生は「自立させよ」という奇妙な不満があり、すれ違いを起こしている。その証のように、ボランティアや就職活動など、ちょっとした「人との出会い」によって、見事に大人に脱皮していく好例も、時折報道されている。この「日本人の体質」と「若者の葛藤」に注目すると、学生の「生きる力」の低下は、一部で懸念されている大学大衆化に伴う学生の本来的能力の低下ではなく、大衆迎合型の体質がグローバル化の波によって加速されたことによる、学生の自律（自立や人生設計）の遅延であると分析できる。この問題は、アイデンティティの確立と密接にかかわっており、これが未熟な若者にとっては大衆迎合が最も安全な生き方となるであろう。

この分析が正しいとすると、解決策は明瞭になる。それは「グローバル」な考えの実践であり、その魅力を学生に示すことである。グローバル化の現代社会は、優れた物や考え方を世界の全ての人が共有できる一方、文明の画一化の側面があり、固有の風土の中で育まれてきた多様な文化や文明が抹消されかねない。これは、世界の隅々で急激に起こっている共通の問題である。「グローバル」とは一般に「地球規模の視点から地域再生の方向を探る」

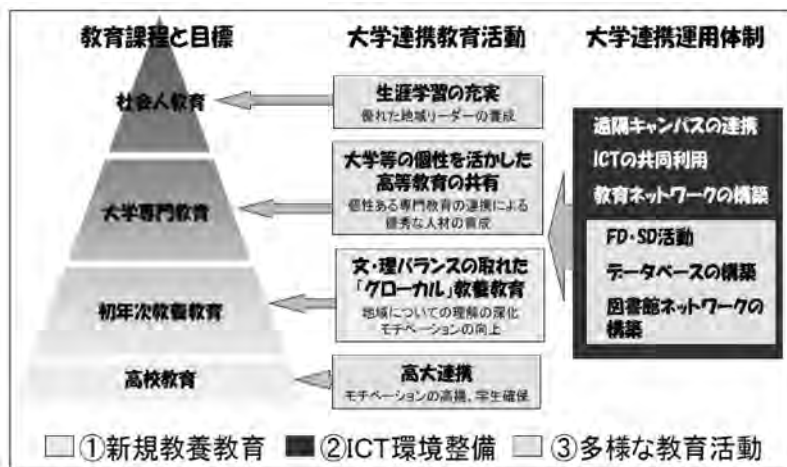


図1 大学等の連携による地域のリーダー養成計画

の意で用いられるが、ここではさらに拡大して「全体のための個の尊厳」の概念を付与すれば、「グローバル」な発想こそ、現在の教育に必要なものではないだろうか。昨今、大学の個性化や差別化が強く求められているが、グローバルな発想では「知的基盤社会の中で個々の大学の発展を探る」ことになる。大学人こそがグローバル化の時代にあって要求されていることではないだろうか。大学の個性化・差別化は「孤立」からは生まれず、連携して各々の価値を持ち寄り、相互作用することによりはじめて深化する。この「競争的切磋琢磨」の相乗効果は、地域連携でも同様である。地域の活性化とは、国際社会における激しい競争関係の中での、地域の魅力の掘り起こしに他ならない。大学や社会自身が様々なスケールでそれを具現化し、その情熱と成果を学生に示すことが現代の緊急課題であると考えられる。

三 鹿兒島の戦略的大学連携支援事業

平成二〇年度大学改革推進事業で採択された取組は「鹿兒島はひとつのキャンパス」地域のリーダーを養成する大学連携と総合教育の構築」である。

鹿兒島県内のすべての大学等（大学・短期大学・高等専

門学校）が連携し、自治体や経済団体等とも協力して、鹿兒島を「ひとつのキャンパス」と捉える。各大学等は、各々の個性と特徴を知的資源として提供しあい、総合的な教養教育をはじめ、様々な教育を学生に提供する。全ての学生は、大学等の壁を越えて交流し、競争的に刺激しあって、鹿兒島を知り、「グローバル」な視点を獲得していく。学生の活力を引き出し、自律を早め、グローバル化の時代に地域貢献に情熱を持った地域のリーダーを養成する。これが、本取組の目的である。

本取組の全体像を図1に示した。対象は基本的には大学生であるが、図にあるように、高校生から社会人までも含んでいる。取り組みの柱は三本である。まず、本事業の目的に添って「グローバル教養教育」をすべての大学等に提供し、鹿兒島とは何かをテーマに、県内の大学生・短大生・高専生を集めて共同合宿の中で実践的に学ぶ。二つ目は、これらの大学等連携を有効なものにするため、広く普及しているLMSのMoodleを使った「教育ネットワーク」を構築することである。これにより、様々な形態での大学等連携を効率的に推進することができる。三つ目は、個性を活かした教育を共有し、一貫して地域のリーダーを養成することを目標にする。

四 大学連携の基盤整備

鹿兒島県内の大学等は地理的に分散している。それらが連携し、それぞれの長所を活かして「ひとつのキャンパス」とするために、重要な基盤整備は情報の共有とスムーズな情報交換である。そこで、ネットワークを利用した二つの基盤を整備している。ひとつは全大学へのテレビ会議システムの導入である。これは、会議のみならず遠隔授業等さまざまな場面での利用が想定される。二つ目はLMSであるMoodleの導入とMoodleネットワークの構築である。

「Moodle」は、共同学習活動や人的交流に基づいたファリーのオープンソースソフトウェアである。図2に示したように、Moodleの特徴は、コンテンツの提供だけでなく、コミュニケーション機能が幅広く提供されている点である。近年、鹿兒島大学が開発したMoodle用携帯電話モジュールによって、ユビキタス性が飛躍的に向上した。これに、各大学で学内無線LANの拡充およびノート型パソコン購入の推奨で、学生の教育ネットワークシステム活用のモチベーションを飛躍させる。

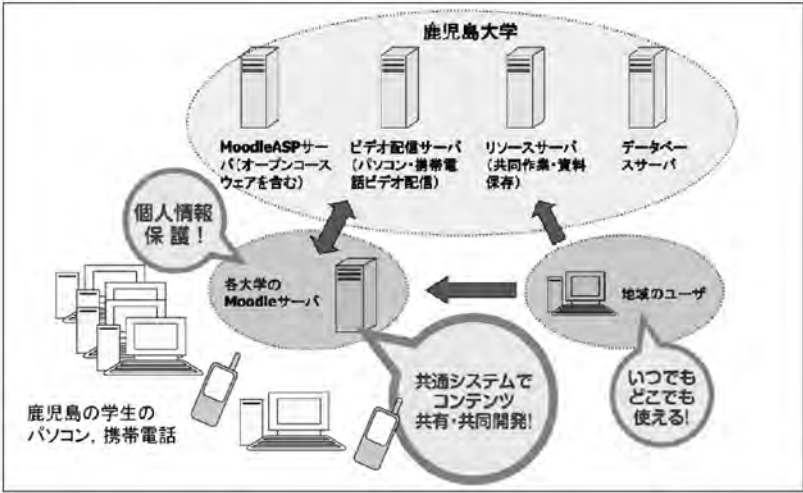


図2 Moodleを使ったICT教育ネットワーク

(一) 高等教育の連携
 平成一三年度に開講した大学連携単位互換科目の受講者は、残念ながら受講者が非常に少ない。原因は、各大学等が地理的に離れ、定められた授業時間割の中で、別の大学等に出かけることができないからである。平成一六年度からは夏季集中講義として「鹿児島県コーディネート科目」

ションの中での鹿児島の個性化・活性化を考える力を養成することに。学生は、午前中講義を聞いた後、午後はグループで学習する。さらに、夜間は、総合討論で競争的に切磋琢磨できるようにする。
 この合宿授業に引き続いて、「かごしまフィールドスクール」を行う。各大学等の学生をシャッフルして小グループに分け、鹿児島の現場を体験・体感させるフィールド体験教育である。携帯電話等による双方向教育を導入した教育ネットワークによる遠隔指導を有機的に結合させて、地域と大学等が一体となって教育に当たる。
 以上の教育の修了生には「教養かごしま大使」の称号を授与する。教養かごしま大使は、所属大学等に帰って、その成果を発表するだけでなく、入試ガイダンスにおいても高校生に鹿児島の魅力を伝える。

五 様々な教育連携とその強化

(一) グローカル教養教育

本取組では、まず初年次学生に三段階のグローバル教養教育を提供する。そのプロセスを図3に示した。
 「かごしまカレッジ教育」では、日本語リテラシー教育を行う。ここでは大学等が連携し、全県同一の目標と方法で、論理的思考力や自己表現能力、コミュニケーション能力を養う。新たに雇用した特任教員の協力を得て学生を指導する。授業提供だけでなく、鹿児島のすべての学生が恒久的に使用できる教材を作成する。受講者のうち学ぶ意欲の高い学生は、次のグローバル教養教育へ進む。
 八月には、共同合宿授業で「かごしま教養プログラム」を提供する。ここでは、参加学生(大学生・短大生・高専生)をシャッフルして、一クラス六〇人程度のクラスを編成する。各大学等の伝統と実績を活かして開発してきた「薩摩学」「WE LOVE 鹿児島」「隼人学」「鹿児島探訪」「鹿児島学」等のエッセンスを持ち寄り、学生の身近にある鹿児島を素材に、文・理のバランスが取れたリベラルアーツ教育を行う。その教育目標は「グローバルな視点の養成」であり、鹿児島の本質と問題点を理解し、グローバルイゼー

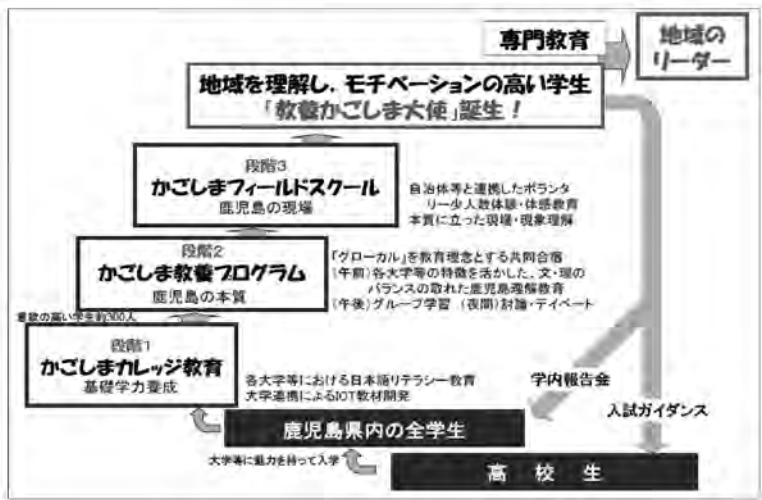


図3 グローカル教養教育のプロセス

を開講し、一定の成果を収めた。しかし、これでも充分とは言えない。一方、大学等連携による留学生交流活動では、毎年、数百人が参加する。開催時期に加えて、教育目的が明瞭であること、さらに、情報伝達が比較的容易であることが成功に繋がっている。これらの経験から、本取組では「教育目標の明確化」「情報周知と利便性」「学習環境」の改善を追及する。

学生にとって魅力のある授業のひとつは免許・資格取得のための授業であり、その開放を進める。

鹿児島県は、歴史的に国際交流に力を注いできた。従来、活動に加えて、多言語多文化プログラムを大学等連携で開講し、留学生を講師としてアジアの言語をはじめ留学生の母国語や文化を紹介する。一大学での受講希望者は少ないが、すべての大学等の学生や高校生、社会人を受講対象にすることにより、まとまった受講者の授業を実現させる。教育経験のある留学生に協力してもらうが、留学生センターの教員の指導により、留学生にとっても貴重な経験となるようにする。さらに、実験装置の共同利用は学生のみならず教員にとって魅力的な連携である。特に、小規模大学には実験装置は充分でなく、各大学等の学内共同利用実験装置を連携大学等間の共同利用装置と位置づけ、使用料金を同一にする。

(五) FD・SD活動

ICT活用が日常化され大学等連携に導入されると、新鮮なFD・SD活動が期待できる。伝統や教育課程が異なる各大学等の授業コンテンツの閲覧や授業参観は、お互いに新鮮に受け止められる情報は多い。休学者・退学者・留年者を減少させるための討論会やフォーラムの共同開催も成果が期待できる。FD活動は、高等学校の教員とも連携して行う。

(六) 地域が利用できるデータベース

自治体との連携で全ての大学等で図書館情報を共有できる体制は平成二二年度に完成する。また、ICT活用が普及された段階で、アップデートしやすい研究者と学生データベースを作成する。研究者データベースは、大学間共同研究をはじめ、地域からの強い要望である産官学共同研究や技術移転事業の受入れ窓口の一本化を可能とし、その効率的な促進につなげる。地域産業の活性化は学生の地元就職率の向上と大学進学率の向上を目標としている。学生活動データベースは、学生間の情報交換と活動の動機付けに効果的である。

(二) 生涯学習

従来、各大学等や自治体が独自に開講していた公開講座や市民講座の情報を一本化して発信し、市民が注目・参加しやすい環境を整備する。さらに、自治体等の協力により、児童や生徒数の少なくなった学校の教室や公民館等をサテライト教室として使用する。過疎化した地域に明るさを取り戻し、地域の魅力の見直しの機会とし、地域文化の拠点とする。

(四) 高大連携

現在の出張授業を、高校生の大学進学意欲の高揚だけではなく、より広く、学びの喜びを味わう観点から検討を加えて、その教育目標の点検・向上を図る

オープンキャンパスは、これまで各々の大学等が独自に行ってきた。大学等連携による開催通知の一本化は、開催日程の大学側の調整を容易にし、遠来の高校生が計画的に複数校に参加できる便宜となる。また、各オープンキャンパスには、各大学等のブースを開設し、会場以外の他大学等の紹介も可能とする。さらに、高校生の関心に応じて臨機応変に、スクールバス等で他の大学等に直送できる体制を整える。これによって、各大学等のアピール力を増強する。

さらに、鹿児島県大学・高校ガイダンスセミナーを、県

以上の活動が「鹿児島はひとつのキャンパス」構想で、地域のリーダー養成の体制が整う。これを、知の拠点のモデルとして、全国に提示する。

六 おわりに

グローバル化の波は、高等教育にも押し寄せ、現在、大学等はサバイバル競争の渦中にある。呉越同舟はありえず、ネガティブな社会的評価が出た途端、大学等の将来がなくなるといわれる中で、本取組では、強い絆の大学等連携を行う。なぜなら、「グローバル」な視点こそが、現代の若者には絶対的に欠落していると考えからである。これは、これまで行ってきた鹿児島県内の大学等連携の実績に基づいた、発展的な考えの帰着である。

本取組の最終目標は、鹿児島県の「知の拠点」の創出である。「グローバル」な視点の養成体制構築には時間がかかるであろう。そのために最も重要なことは、持続・発展可能な企画であることである。この三年間で、大学連携の基盤を整備する。最近、鹿児島県で「大学地域コンソーシアム鹿児島」が立ち上がった。いよいよグローバル化の波へ地域高等教育は発進する。